慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	経済学諸概念の社会心理学的考察（下）
Sub Title	
Author	上原, 好咲
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.6 (1924. 6) ,p.855(91)- 858(94)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19240601-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

即ち第十六世紀初頭以後、從來の各地方の都會を中心とする地方的市場の上に更に全英國（インゝランド）の大部分に亘る一大市場の形成に向ふ強き傾向が現はれ、同世紀の後半より益々其勢を強めて第十七世紀中葉には、全英國（インゝランド）の大部分に確實に其市場地域を擴大した。

而して、此ロンドンを中心とする Metropolitan Market の形成に當りて三個の自然的條件が其發達を助けた。即ちロンドン周圍の地方の豐饒なりしこと、河川、海上による運輸の便、世界貿易路に對する其位置等である。ロンドンに近き諸州は最も肥沃の地を有する、Norfolk, Upper Thames, Sussex, Kent 及 Cambridgeshire, 等にして、其等の諸州の穀物は初めロンドンに於て消費せらるる所要穀物の全部或は大部分を又後には更に外國輸出の穀物をさへも充分に供給するの生産力を備へた。之等の諸州の穀物生産力の大なりしことは、ロンドンをして大穀物市場の中心たらしめたれども、又同時に其等の諸地方の耕地の擴大、耕作法の改良等による産出額の增加を齎らせる誘因は元よりロンドンに於ける益々增加し行く穀物需要であつた。又陸路運輸による穀物取引は到底長途遠隔の地域に亘ることが出來ない。河川海路の便に惠まれたる地のみ大なる市場中心地となることが出來た。而も更に對外的貿易に有利なる位置を占むるの條件は、Bristol, Southampton をして全國的穀物市場の中心地たらしめざりし一の有力なる原因であらう。之に反して、其等の諸條件は孰れもロンドンをして同市場の一大中心地たらしむるに貢献した所のものである。（Gras: Evolution of the English Corn Market p. 73-77. p. 95-129 に據る）（終）（筆者の不備のために記すべき多くのことを殘したのは慚愧に堪えない。若し他日許されて補正の時をも得ば幸である）

經濟學諸概念の社會心理學的考察（下）

上原好咲

六

慾望、滿足、効用に關するム教授の心理學的研究の諸點は略ぼ此に盡きて居るが、就中教授の以て最も重要な論點として居る處は、慾望又は効用の力學的前進といふ點に在ると思はれる。即ち一財貨から擧揚される効用は、前記の如く上向、停頓、下向の曲線の上を推移するが、その間雜多、差別、新規等の分裂作用は必然的に意識の新分野を展開して、依つて滿足の飽滿や倦怠、衰退や休止を防ぐが故に、右の下向曲線は効用の零を示す一定點に達する前に方向を轉換して、再び上向に移るといふのである。

然らば再び上向するその曲線はどう落ち付くか。茲に於て教授は進歩の螺狀線（the spiral of progress）なるものを想像して居る。即ち下向から上向に移つた効用の曲線は再び停頓及下向の順路を踏んで三度上向に轉ずる。之れが律動的に循環すると其處に價値の螺狀線、生産の螺狀線といふやうなものが作られるといふのである。教授の見る處に依ると律動的循環なることは自然界の一切の運動を支配する根本法則の一つであつて、價値、消費、生産、人口といつた諸般の經濟現象も、之れを力學的に見る時、皆な此循環運動を續けつゝ前進するものといふ外はないのである。

即ち價値の螺狀線（the spiral of values）を說いて、「曰く我等が心理的並に社會學的進化の過程に於て、自然主義的官能的から理智的審美學的に、利己的又は個人主義的から利他的且つ社

會協力主義的（Communalistic）に、物質的偏黨的から精神的博愛的に漸進し行く時、そこに生活上の諸價値は益々高尚な水平に向つて上進する。……此向上し行く價値の新らしい線を畫く上向下向の律動的循環運動は之れを進歩の螺狀線の形に於て表はし得るのである」と（Mukerjee; Principles of Comparative Economics, Vol. I, p. 28）。

又生産の螺狀線に就て曰く、「一定の條件の下に於ける生産上、資本及勞働の單位量を漸次增加して行くと、その生産の齎らす相對的報酬は、報酬漸減の法則に從つて一定點までは增加して行き、それから比較的變化の緩慢な若くは大體不動の狀態を暫く續けた後、報酬漸減の法則通りに假設的な零の點まで減少して行く、之れ停止した條件の下に於ける産業に就ての眞實である。處が動的條件の下に於ては、即ち進歩した科學的設備又は技術乃至は原料或は動力の新資源の斷へず出現する産業に就ては、……前階梯に於て一度達せられた限界を超へて再び報酬遞增の現象が生ずる。但し此向上した水平線上に於ても前段と同樣の上向、停頓、下向の過程は繰り返へされるのであつて、斯くて此循環は永久に上進し行く水平線上に無限に反覆されるのである。蓋し一方に於て人類の天才と發明とは無盡藏を開くものであると共に、他方に於て慾望と價値との進歩的膨脹亦際限を知らぬからである」と（ibid., p. 29-30）。

次で敎授は人口問題に就て同樣の曲線を說明して居るが、生産の無限的發展を說く立場に於て當然マルサス流の悲觀說と正反對の見解を取ることは、その說を詳しく紹介するまでもなく容易に納得されるであらう。

斯くて以上の結論に曰く、社會的進歩の決定要素たる生産技術並に生産事業の段階、消費及社會的價値の規模、人口の質及能力は、循環的又は律動的運動をなして、人間生活の規模樣式を伸展せしめ、永久に高尚な水平から更に高尚な水平へと向上し行くのであつて、斯くて凡ゆる生命進化に共通な無限に反覆される典型である處の進歩の螺狀線を形成するのである」と。（ibid., p. 37）

七

前回から通じて以上要するに限界効用說の敷衍乃至擴充であると見て大過ないと思ふが、此部分及物理學的並に生物學研究の部分（本誌第十六卷第十一、十二號拙稿參照）は、敎授に依ると經濟的進化を規定する諸條件を現に在るがまゝに謂はゞ平面的に捕へ來たつて解說したものに他ならないのであつて、未だその根本的な原動力が如何なるものであるかに就ては、僅かにヒントを與へただけになつて居るのである。即ち人間の慾望、感興、要求等要するに經濟行爲の動因となる諸般の心理的現象は、單に狹隘にして理性的な利己心や個人的な利害打算からのみ生み出されるのではなくて、無意識的本能的の感情及生物學的人種的の集團意識からも生ずるのであつて、而かも後者は前者より社會進化の決定要件として先天的なのであるとは、敎授が以上社會力學說の冒頭に述べて居る所であること、本稿前回の第一項に記した如くである。そこで以下諸般の本能が經濟行爲の根本動因として如何なる重要意義を持つかに關する敎授の社會心理的研究の部分を見やうと思ふ。

抑も經濟學が、如何にして最小の勞費を以て最大の幸福を得べきかを研究することに、その主眼を置く以上は、幸は快不快の間に有利なバランスを覓める快樂主義に一切の推定の基礎を

置かねばならぬ。處が社會心理學の最近の進歩は、社會的進歩の基礎としての此快樂主義を根底から覆へして、その代りに人間が原始的第一次的に本有する幾多の本能乃至情緒が、人間社會なる機械組織を運行せしめる普遍的の動力であることを闡明した。夫れ等幾多の本能の中特に經濟生活上に重要義を有つものを擧げると、群居を好む本能、血族愛及家庭生活に關する本能、自由主張の本能、服從の本能、勞働及製作の本能、壓迫及屈從に對する反撥の本能、社會的同情の本能、相互扶助の本能、弱者擁護の本能等である。是れ等諸種の本能の中ム教授が最も力說して居るものは相互扶助の本能であつてそこに生ずる社會的協力現象は、從來の經濟學が偏重して來た競爭現象に增して、眞に經濟學の對象として重大なものであるとして、教授の比較經濟學乃至鄕土經濟學の基礎は一面之れに立ち、更にその提唱するコムミュナリズムの精神亦茲に發して居るのであるが本稿は其處に涉るの餘白なく、また教授は右の中特に血族愛及家庭生活に關する本能、勞働及製作に關する本能、服從及統卒の本能、社會的同情及弱者擁護に關する本能夫々に就て分類的の說をなして居るが詳細に紹介する程のこともない。（完）

支那工業の現狀に就て（三、完）

及川恒忠

（四）登錄工場の資本組織

農商部統計は工場の資本及び資本組織に就ては諸を缺如に付したり。此種の調査は本と極めて困難なればなり。元來各國の工業統計中最も信ず可らざるものは即ち資本の統計にして調査の時、工場主或は支配人は種々の猜疑を有し、往々眞相を以て人に示めすを肯せざるなり。資本組織に至りては、たゞ登錄せる工場のみ是を調査し得へし。然かも歷年の農商統計載する所甚だ簡なれば、茲に『支那の工業』が轉錄したる民國二年度の工業會社資本組織表に從ひ藉りて大概を知ることとせん（表中の工業は鑛業をも包括す）

（第十二表）登錄工場の資本組織（民、二年）

	株式	株式有限	合資	合資有限	未詳	總計
一萬元以下	一二	八六	二九	四七	八四	二五八
一萬元至五萬	六	八五	二六	一四	三九	一八〇
五萬元至十萬	一	二二	四	五	九	四一
十萬元至二十萬	—	二九	—	四	六	三九
二十萬元至五十萬	一	二三	一	—	二	一七
五十萬元至百萬	一	九	—	一	—	一一
百萬元以上	—	七	—	—	—	九
總計	二一	二六一	六〇	八二	一四一	五六五
資本總額	一、〇三九五二〇	三九二四四九〇五	一、一六五五七一	二、二九四五五一	五、五〇〇六一三	四九、八五七一六〇

（五）全國工業の概況

第十二表以前のものは皆工場に限りたり。茲に第十三表（A、B）を編して全國工業の概況を示さん。表中の製造戶數は工場及び舊式工業を包括して言ひたり。全國の職工は約一千萬にして其內男工五分の四を佔め、女工五分の一を佔む。